

聖霊降臨日

2010/5/23

聖ヨハネによる福音書第20章19～23節

於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

今日は聖霊降臨日の祝日です。イエスさまの弟子たちに聖霊が降り、弟子たちはいろいろな国の言葉で神さまの偉大な御業を語り出したことに因んで、先程、使徒書をドイツ語で読んでいただきました。雰囲気がお分かりいただけたでしょうか。

聖霊降臨日はペンテコステと呼ばれていますが、50日目という意味です。イエスさまのご復活の日から50日目に当たります。イエスさまの弟子たちは、イエスさまが、「父なる神さまが与えて下さると約束されたものを待っていないさい」とおっしゃったみ言葉に従って、エルサレムの2階座敷に集まって待っていました。その弟子たちの上に、この日、聖霊が降りました。そして、聖霊に満たされて、弟子たちはイエスさまのことを宣教し始めました。そこに教会が生まれたのです。教会はいつも聖霊と共にあるのです。聖パウロ教会も、今年は創立134周年を祝いますが、これまでの歩みの上に何時も聖霊の導きがあったことを憶えたいと思います。

さて、聖霊の働きというのは、どのようなものでしょうか。旧約聖書の中に、エゼキエルという人が、神さまのみ言葉を人々に伝えた預言の書があります。その中で、エゼキエルは、「わたしは彼らに一つの心を与え、彼らの中に新しい霊を授ける。わたしは彼らの肉から石の心を除き、肉の心を与える」(11:19)と神さまのみ言葉を語っています。

先日、海のない群馬県で珍しい鯨の化石が見つかって、博物館に見学者が沢山訪れているという報道がありました。わたくしも中学生の時にクラスメートの中に考古学に興味を持っている男子の生徒がいて、いつも小さなハンマーを教室に持ってきていました。休みの日に、石を割って化石を探しに行くのが楽しみだったようです。

化石というとアンモナイトという渦巻き型の殻の化石が有名です。昔々の生き物が死んで、その上に砂などがたまって岩になります。その岩が何かの拍子に割れて、中に残されていたものが化石となって発見されます。生きていたときは柔らかであった生物が、石のように固くなって見つかります。

わたしたちの心も、この化石のように、固くなってしまふことがあります。イスラエルの人たちも、イエスさまが生まれるよりも遙か昔のこと、神さまに背いて心を頑なににして、神さまに従うことをしませんでした。文語の旧約聖書を読みますと、神さまに反逆するイスラエルの民のことを、「項(うなじ)強(こわ)き民」と呼んでいます。首筋がこわばって硬くかたまってしまふのです。心が固くなると、それが首筋に現れると言うことなのでしょう。わたしたちも肩こりをしたようなときは、心も固くなってはいないか、顧みる必要があるかもしれません。

イスラエルは、心を固くして神さまに背いたために、当時の強国であった

バビロンとの戦争に敗れて、多くの指導的な人々が捕えられて、遠いバビロンへと連れて行かれてしまいました。連れて行かれた人たちは、そこでは何の望みもなく、死んだも同然の状態にありました。

その人々の様子を、エゼキエルは一つの幻を見て描きました。それは、ある谷の中におびただしい骨がころがっている光景です。そして、その骨は枯れていたと言いますから、死んでから、相当の時間がもう経っている骨です。とてもその骨から、再び人間が生き返ることなど、望むことのできないような状態です。

神さまはエゼキエルに、その骨に向かって預言して言いなさいと命じられます。エゼキエルがその通りにすると、骨と骨がカタカタと音を立てて近づき、骨の上に筋ができ、肉が覆っていきます。でも、そうしてできた人の中には、霊がありませんでした。

そこで神さまはエゼキエルに、今度は霊に預言するように命じられます。「霊よ、四方から吹き来たれ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生きる」(37:9)。そのように預言すると、死んでいた人たちは生き返って、自分の足で立つようになります。

これは、イスラエルの人々のことを表わしています。遠い外国に連れて行かれ、将来に対して何の希望も見出すことのできないでいる人々に、神さまがご自身の霊の息吹を吹き込まれると、そこに豊かな命が生き生きと動き始めるのです。

神さまの霊の働き、聖霊の働きは、このように希望を失って生きる意欲をなくしている人々や、心が氷のように冷たくて石のようにかたまっている人々に、そして心の扉を固く閉ざして、うなじを硬直させている人々の中に入り込んできて、石の心を柔らかい肉の心に作り替え、死んだものに新たな命を注ぎ、そして自分の足で立つことができるようにして下さいます。これが聖霊の働きです。

イエスさまの弟子たちも、イエスさまが十字架につけられて殺されてしまった後、ご復活の知らせを聞いても、そのことが信じられなくて、家の中に閉じこもって固く扉を閉めていました。そこに突如としてイエスさまが立たれたのです。

聖霊は、そのイエスさまと同じような仕方でもって、わたしたちの中に来て下さいます。わたしたちが、これからどうなるのか、全く見通しが立たないで、恐れの中に捕らわれているような状態の中に、神さまは来て下さるのです。そして、「あなたがたに平和」と、平和を告げられます。

わたしたちも、誰かと喧嘩をして怒っていたり、大切なものをなくしてしまったり、悲しく辛い気持ちでいたり、独りぼっちで寂しいようなときは、心の扉を閉じて自分の中に閉じこもってしまうことがあります。人の言うことが聞こえずに、自分の気持ちや感情ばかりが、心の中に一杯に拡がって、他のものを寄せ付けようとはしなくなります。自分の思いや考えにばかりに捕らわれ、それにしがみつ়くのです。

そのような時にこそ、わたしたちは、聖霊がわたしたちの中に働いて下さ

ることを信じ、聖霊の導きをお祈りすることが大切です。自分に捕らわれて、そのまま構わないと考えたら、それはわたしたちが後ろ向きの人生を過ごすことになってしまいます。

いつも怒っていたり、人を恨んでいたりと、誰も友人ができずに、寂しくつまらない毎日を送ることになってしまいます。それは、石の心です。固くて人をはねつけてしまう心です。そのような頑なさからわたしたちを解き放ち、柔らかな肉の心に作り替えて下さるのが、聖霊の働きです。

それは、罪が赦されるということと同じことです。自分にこだわって、後ろ向きに過ごしてきたあり方から、未来に向かって自分が開かれていくという方向転換です。その罪の赦しを宣言することが、教会の宣教です。そのために教会は生まれました。

先程、「あなたの息を送って下さい、すべてが新たになるように」と詩篇を歌いました。今週は、この歌を歌いながら過ごしていきたいと思います。神さまの息、これが聖霊です。最初の人間アダムが土塊から造られたときに、神さまはご自分の息をアダムに吹き込みました。それによってアダムは生きる者となったと書かれています(創世記2:7)。わたしたち人間は、神さまの息によって生かされているのです。息という言葉は旧約でも新約でも、風とか霊とかいう言葉と同じです。

ヨハネ福音書では、イエスさまは、夜、秘かにイエスさまに教えを請うためにやって来たニコデモに対して、「風は思いのままに吹く」と言っています(3:8)。神さまの霊の働きは、人間によって限定されないのです。自由に働かれるのです。人間の限界を超えて働くと言ってもいいでしょう。だから、人間の可能性としては、もうこれが精一杯で、それ以上のことは望むことはできないと思えるような状態にあっても、尚、それを超えて新たな道を開いて下さるのです。

復活して弟子たちにお姿を現されたイエスさまは、弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい。誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される」と言われました。この箇所は、ヨハネ福音書の聖霊降臨の場面と言われていますが、アダムが神さまによって息を吹きかけられたと同じように、弟子たちもイエスさまの息吹によって新しい人間に造りかえられたのです。そして新しい創造は、直ちに罪の赦しと結びつけられているのです。罪の赦しは、わたしたちにとって最も困難な課題です。

もう20年以上も前のことになりますが、ある中学校の若い先生が教え子に殺されるという痛ましい事件がありました。その生徒は台湾から帰化した少年で、日本語が良くできなかったようです。そのためにクラスの中でも他の生徒たちと上手く行かず、孤立して友だちもできませんでした。担任のその先生だけが頼りであったようです。しかし当時の新聞の報道では、事件の起こった頃、「先生と生徒の間に、感情的な行き違いがあったのではないか」と推測していましたが、学校を休みがちになり、そのことを注意されてカツとして犯行に及んだのではないかと報道されていました。亡くなった先生のご両親はマーガレット教会の信徒で、ご本人も吉祥寺のプロテスタントの教

会に所属していました。

私はその頃、まだ教区事務所で働いていましたが、同じ建物の中にある BSA 聖アンデレ同胞会の事務所で書記をしていた、当時、同じマーガレット教会の信徒であったご婦人が、葬儀の模様を報告してくれました。

お父さんが参会者に挨拶された中で、息子を殺したその生徒のことに触れて、「その子は息子が愛した生徒です。だからわたしたち夫婦も、その子のことを愛します」と述べたということでした。

事件は、教育熱心な先生が生徒を一生懸命指導しようとして、いわばその愛が裏切られて、何とも悲惨な結果に至ったということでした。愛などというものが、見事にその無力さを露呈したとでも言うべき、言いようのない人生の寂しさ、惨めさを見せつけられたような事件です。その事件に接したすべての人が希望を失ってしまうような、絶望に捕らわれるような事件です。

しかし、この事件はそれで終わったのではありませんでした。これだけで終わっていたなら、わたしたちは人生は空しいものだという結論に達していたと思います。そうではなくて、「息子が愛した生徒だから、わたしたちも愛します」という父親の言葉の中に、わたしたちは一筋の希望の光を見出すことができるのではないのでしょうか。

この報告を私にして下さったご婦人のご主人は、当時はクリスチャンではありませんでしたが、この言葉を聞いて腰を抜かした、腰を抜かすほど驚いたというのです。人生は無惨だ、寂しいものだとしか思えないような悲しみの中で、過去の楽しい思い出にしがみつくと以外に、その後の生きる道がないようにしか思えない中で、これからは息子と同じようにその生徒を愛して生きていきますという言葉は、後ろ向きではなくて目を前に向けて生きていくことを宣言しています。また、そのような歩みをほかの人たちに促しているように思えます。この宣言は、まさに古い殻に捕らわれている人にとっては、腰を抜かすような言葉です。

見栄や虚勢、また建前からは発することのできない言葉です。後に伺ったところによれば、あの時、自然に口から突いて出てきた言葉で、ご夫婦ともそのように感じていたということでした。聖霊が働いてその言葉を語らしめたのでしょう。

今日、この聖霊降臨日のお祝いの日にあたり、わたしたちも自分で作り上げている固い石の心を取り除き、柔らかな肉の心へと作り替えていただくように、「聖霊なる神さま、わたしたちの中に来て下さい」とお祈り致しますよう。